

U-Team Invitation に参加して

三橋大輔¹⁾

はじめに

硬式テニス部では多くの方々の協力のもと、筑波大学国際テニストーナメント（国際テニス連盟公認）を4年間開催している。その活動の一環としてテニスを通して東南アジア諸国との交流を進めており、そのひとつにタイ王国がある。また筑波大学は国際化を進める中で、体育専門学群はタイの国立チュラロンコン大学のスポーツ科学部および教育学部保健体育学科と学部間協定を結んでいる。チュラロンコン大学テニス部とはこれまでも相互の大学の練習に参加するなど交流を進めて来た。今回の U-Team Invitation は、チュラロンコン大学が主催するタイ国内の国立大学によるチーム戦であり、筑波大学テニス部はチュラロンコン大学からの誘いを受けて参加した。筑波大学からは硬式テニス部員1年生から3年生まで男女計20名が参加、山田幸雄テニス部長（体育系教授）、三橋

がスタッフとして同行した。平成25年11月20日に日本を立ち台湾経由でタイへ向かい、26日に同ルートで帰国した。

大会概要

大会は平成25年11月22日から24日まで、チュラロンコン大学テニスコートにおいて計8大学が集まり開催された。

試合は男子シングルス2、男子ダブルス2、女子シングルス1、女子ダブルス1、混合ダブルス1の計7ポイントで争われ、各試合とも3セットマッチ（ファイナルセットはスーパータイブレークを採用）であった。最初に抽選で4大学ずつの2グループに分け、初日と2日目日にわたりグループ内でのラウンドロビン（総当たり戦）を実施、その結果により各グループ上位2大学、下位2大学にわけそれぞれ4大学で最終日にトーナメントをおこない最終順位を決めるという方式であった。



写真1 大会の横断幕

大会を振り返って

テニスコートはバンコクを中心部にありながら、整備されたハードコート10面にナイター設備を完備、その他にクラブハウス、軽食やテニス用品も販売する売店も併設された充実した環境であった。また大学生の利用だけでなく、小学生らしきジュニアや地元住民らがプレイしていたり、大会期間中には観客も訪れる等、開かれたコミュニティとしても機能しているよう

1) 筑波大学体育系

であった。これは大いに参考にしたい点である。



写真2 会場の様子

さて結果としては筑波大学はラウンドロビンを勝ち上がり、上位トーナメントの決勝まで進んだものの優勝候補の筆頭であるチュラロンコン大学に2-5というスコアで敗退し準優勝であった。

日本国内の大会をはじめ通常チーム戦の場合、実力のある選手をシングルスに起用する。しかしながらタイの大学のチーム戦では、実力のある選手をダブルスに起用するケースが多かった。タイ国内は年間を通して気温が高く、暑さのため長時間プレイすることができず試合時間の短いダブルスをプレイすることが多くなる。その理由によりシングルスよりもダブルスを重視する傾向があるとのことであった。そのため国際大会などでもシングルスよりもダブルスで活躍するタイ選手が多い。

タイのダブルスの特徴としては、スピード感がありプレイもパワフルであった。筑波大学チームは、それらに対抗するために戦術などを工夫して戦ったが負けることが多かった。戦術などでは勝っていたと思われるので、今後はフィジカル強化を図りプレイのスピードなどを見直す必要性を感じた。しかしながら、タイの選手は上記のような環境のためシングルのレベルアップは進まず、ダブルスも長時間になると疲労がたまりパフォーマンスは著しく低下し

てしまうらしく、これがタイのテニス界全体の課題である、とチュラロンコン大学のコーチが教えてくれた。

今回参加した学生は3年生男子1名を除けば全員1、2年生であり、さらには授業等の関係でレギュラーの半分近くが欠けた状態であったことを考えれば健闘したように思う。また全5対戦のうち、参加したメンバーが全員一度は出場し、これまでレギュラーとしての出場経験の無い学生にとっては大きな経験値を得たようである。さらに日本国内の学生大会においては混合ダブルスという種目は存在せず、男女混成のチーム戦形式も無いため、チームとしての一体感、筑波大学への帰属意識も養うことができたように思う。

タイの方々は快く我々を受け入れてくれ、非常によくしていただいた。サービス精神に溢れその内容は多岐に渡った。それらに感謝するとともにタイの学生が日本を訪れた際には同じようなもてなしをしたいと思う。タイの学生らはとてもフレンドリーで、筑波大学の学生はすぐに親しくなることができたようである。ユニフォームやメールアドレスの交換をするなど学生間での交流も進んでおり、筑波大学へ留学してみたいというタイの学生が多数いたとの話も聞いている。今後のさらなる交流に期待したい。



写真3 ミックスダブルス



写真4 他大学との記念撮影

海外での生活

参加した学生の多くは海外へ渡ったのが初めてであり、生活面においても様々な経験をし見聞を広げることができたように思う。タイでは英語でのコミュニケーションを余儀なくされ、初めは遠慮がちであったが徐々に自然に英語が口から出るようになった。しかしながら学生の多くは、十分にコミュニケーションが取れたとは感じておらず「もっと英語を勉強しよう。」という考えに至ったようであった。

またツアーを組んでタイを訪れたわけではないので、食事や必要な買い物はすべて自分でしなければならなかった。そのため学生らは自分で換金し、交渉し、商品を得る。こういった行動でも英語でのコミュニケーションの必要性を感じたとともに、物価の安さにも触れ日本経済の強さを実感したことと思う。また中にはスリの被害に会った学生もおり（パスポート等は無事）、またさらにその学生からの情報により同じ手口のスリに遭遇したものの難を逃れた学生がいた等、日本では得られないインパクトの強い経験をすることもできた。これらにより日本の良さを外から感じることもできただろう。

さらに遠征最終日にはチュラロンコン大学の学生らとともに、アユタヤ遺跡、パタヤビーチの2コースに別れて楽しい時間を過ごした。より深い交流を果たすとともにさらなる見聞を拡

げたようである。これらの経験が、テニスだけでなく今後の彼らの人生に良い影響を与えるきっかけになればと思う。



写真5 アユタヤ遺跡

大学への訪問

遠征期間中には、タイ国内の2つの大学を訪れ交流もおこなった。

まずは筑波大学と協定関係にあるチュラロンコン大学スポーツ科学部の学部長を表敬訪問した。その後スタッフの案内でスポーツ科学部の施設を見学したが、筑波大学に劣らない先端の機器を揃え、それらを熱心に説明してくれた。教員や学生の相互受け入れはすでにおこなわれており、今後のさらなる関係進展について会話が弾んだ。

もうひとつはシーナカリンウィロート大学である。この大学はタイの国立師範学校の流れを汲む国立の教員養成の大学であり、筑波大学と似た位置づけであるように思われる。広大なキャンパスに多くの学部を置き、体育学部もある。この大学は日本の大学との交流を進めており、すでに体育学部の学生を仙台大学に留学させたことがあるとのことであった。

いずれの大学においても、現在の東南アジア諸国が持つ活気溢れる熱いエネルギーを感じる

ことができた。今後の関係構築に微力ながら貢献していきたい。



写真 6. チュラロンコン大学表敬訪問

最後に

このような機会を提供してくれたチュラロンコン大学をはじめ、ご協力いただいた多くの関係の皆様へ謝意を申し上る次第である。今回の遠征は学生らにとってテニスを通しての交流のみならず見聞を広めることが出来、また筑波大学としての交流も果たせ、非常に有意義であったように思う。今後もテニスを通じた国際交流を続けて行きたいと考えている。またこういった活動を可能な限り学生に提供し、海外へ目を向けるきっかけとなるべく働き掛けていきたいと思う。